

神話オリエント

Near Eastern Mythology
John Gray



Near Eastern Mythology
John Gray

NEAR EASTERN MYTHOLOGY by John Gray

Copyright © 1969, 1982 by John Gray

Japanese translation rights arranged with Hamlyn Publishing Group Ltd.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

オリエント神話

1993年 8 月25日 第 1 刷印刷

1993年 9 月15日 第 1 刷発行

著者——ジョン・グレイ

訳者——森雅子

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町 1 - 29市瀬ビル〒101

[電話] 3291-9831 (編集) 3294-7829 (営業)

[振替] 東京 9 - 192955

印刷所——ディグ

製本所——小泉製本

装幀——戸田ツトム + 岡孝治

オリエント神話

目次

I メソポタミア——歴史地理 7

シュメール人／砂漠の部族／セム人による支配

II メソポタミア——宗教 23

アヌとエンリル／水神エンキ／太陽神シャマシュ／月の神シン／母神イナンナ（イシユタル）／ネボとマルドゥク／エレシユキガルとネルガル

III メソポタミア——神話 49

バビロニアの新年祭／バビロニアの創世神話／イシユタルの冥界下り／アグバの神話／ギルガメシュ叙事詩／ギルガメシュとエンキドゥ／巨人フワワに対する偉業／ギルガメシュは女神イシユタルを拒絶する／エンキドゥの死／ギルガメシュによる不死の探究／ウトナビシュティムと洪水／ギルガメシュによる不死の探索の断念

IV メソポタミア——王 135

エタナの神話／アツカドのサルゴンの伝説／王の社会的責任／生命の木

V カナアン——歴史地理 163

土地／文化の発達

VI カナアン——宗教 173

カナアン文書／主神エル／バアル——天の宮廷の行政官／女神たち／下位の神々／農業のサイクル

VII カナアン——神話 197

バアル神話／バアルとアナト／家の建造／バアルの死と冥界への下降／バアルの再生とモトの死／優雅で美しい神々の誕生／呪文の中の神話——〈ホロンと蛇〉／〈酔っているエル〉／〈月神と月の女神の結婚〉

VIII カナアン——王 251

ケレト伝説／タニエル王の伝説／アクハトの誕生／アクハトの死／豊饒の分配者としてのタニエル／アクハトの死に対する「乙女」の復讐／聖なる王権

IX イスラエル——はじめに 285

X イスラエル——旧約聖書の神話と歴史 295

大いなる解放と契約／葦の海の脱出／シナイにおける神の顕現／申命記の歴史／ヨシユアの征服／原因譚のもしくは説明的神話／サムソンの物語／エリヤとエリシャの物語

XI イスラエル——詩篇と予言書における詩的イメージの神話 325

XII イスラエル——神の治世 345

幕屋の祝祭／創造者としての神／ヨブと神の「王権」／黙示文学／救世主の勝利／サタン
の発達

XIII イスラエル——王と救世主 383

イスラエル——神聖共同体の王／「天界の王」の行政官としての王／ダビデ的救世主／救
世主の大宴会／人の子

訳者あとがき 405

オリエント神話関連地図

索引 i

オリエント神話

I
メソポタミア
——歴史地理

「歴史はシュメールに始まる」と言われている。しかし、メソポタミア南部ではシュメール人が定住する三、四千年前にすでに初期の農業共同体が基礎的に完成していたことはさておいても、エジプトやインダス川流域の同時代の、独立した文明を考えに入れると、これは多分いくらか誤解を招く表現である。むしろ、この表現はメソポタミアにおいて人々が環境を理解し、それを支配するための協力へと向かう主要な推進力が起こったことを強調したものに他ならない。

シュメール人

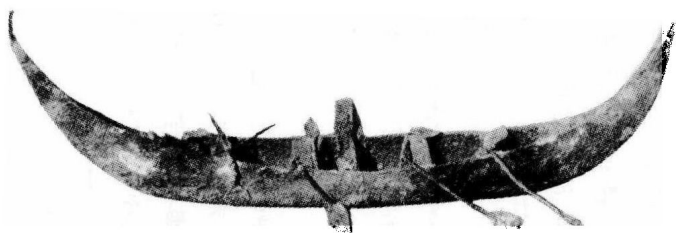
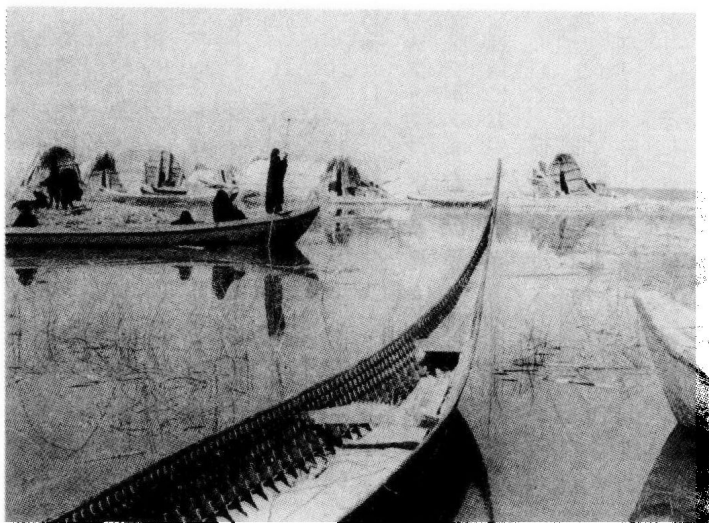
メソポタミアでは、チグリス川とユーフラテス川の気紛れな洪水が、広い湿地帯の自然の濾過作用でおびただしい量の沈泥（シルト）を堆積し、豊かな沖積平野は焼けつくような太陽と氾濫した水のなすがままに横たわっていた。それは政治組織を持った支配者たちが現われ、灌漑し、排水し、「混沌」とした水に「秩序」をもたらすのを待っていた。この水と人との対立は、メソポタミ

ア南部にひろがる湿地帯の、奇妙な水陸両生の生活を営むマーシュ・アラブの世界において今なお見ることが可能であり、そこでは人々が水から土地を、しばしば素手ですくいとっている。後述するとおり、この太古からの水との闘いは、バビロニアとアッシリアの新年祭における典礼の主題である。周期的に起こる大洪水は、古代のシュメール人にとつてと同様に、現代においても現実味をおびた伝承である。実際、シュメール人はその伝説上の洪水を、歴史時代と先史時代との間の「大きな分水嶺」と見なしていた。彼らにとつて、最も初期の時代は個々の治世によつてではなく、王朝やその創建者、その最も有名な支配者等によつて区分されていた。その結果、シュメールの王名表はきわめて長命な族長たちの名を列挙し、彼らと比較すればかのメトセラ（創世紀五・二七）ですらほんの若僧に過ぎないような印象を与えている。

このメソポタミア南部において、我々は人々がその環境と関連を持った最初の、そして明確な証拠を見出すが、それはシュメール神話という形で残されている。前四千年紀の中葉に、人々は鋭い硬筆で湿つた粘土の上に文字を書くことを発明した。彼らは単純な絵文字を用いていたが、それは最初単語を表わすために編み出され、ついで音節として子音と重要な母音の組み合わせをつづるまでに進歩した。この進歩は神殿——実際にはその神殿の財産をとりまく共同体の成長の副産物であり、そこでは会計書類が細心の注意をはらつて保存されていた。このような共同体において、住民も神殿の財産である自然資源も都市国家を形成するために組織化され、人々はその環境を体系的に理解する第一歩を踏み出したのである。

しかし、前三千年紀に入ってもなお、客観的な物の見方を期待することはできない。というのも、古代メソポタミアの人々はその環境から余りに大きな影響を受けていたからである。結局、本書の範囲外であるより人間中心的な時代になって、人々はようやく自然現象を観察したり、分類したりすることができるようになったのである。ただしその場合にも、分類という作業には社会をそれが存在しているより大きな環境に、より調和的に適合させるという実用的な目的が内包されていたので、人々は決して完全な客観性を示すには至らなかった。我々が研究しようとしている神話の中には、科学的アプローチへ向かう何らかの傾向が存在するが、その劇的な表現はむしろ情緒的な関心を示し、科学的ではない。近東の神話の中には、論理の矛盾している多くの要素があり、特にそれは昔ながらの宗教儀式を反映し、必ずしも最終的に文学として結晶したとは考えられない神話の場合に顕著である。メソポタミアの神話を正しく評価するためには、このことは記憶しておくかねばならない。同様に、我々が考察しようとしている神話の大部分が、前三千年紀に現在の文学形態に到達していたとしても、それは長期にわたる編集作業の結果であり、その時代の科学的探究心の対象であつたことを認識しておくことも重要である。

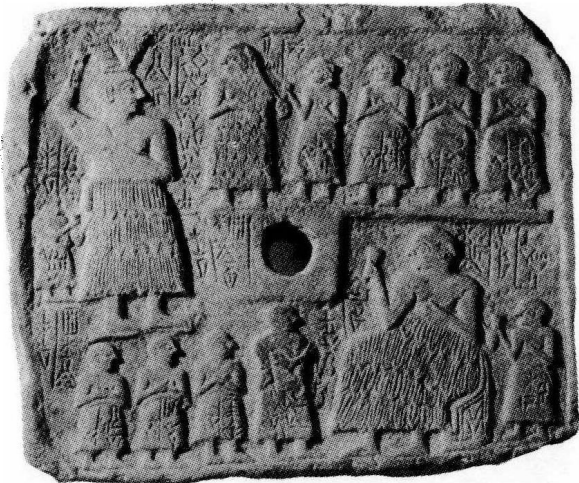
幅広の頭を持ち、肉体的にも言語的にもセム人とは全く異なっているシュメール人の起源は、いまだ解明されるに至っていない歴史上の大問題の一つである。彼らは南東から、ペルシア南部の道もしくはペルシア湾を通つてやつて来たと推測されている。彼らが早くから船に親しんでいたという事実は、後者の説を支持するように思われるが、その他、彼らの神話の一場面が（現在の）ペル



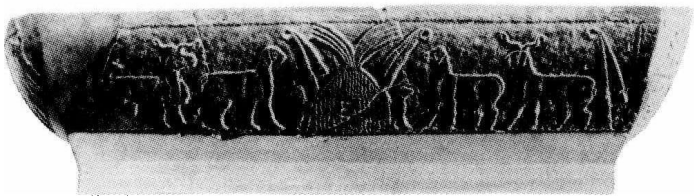
下はウルの王墓から出土した銀製のタラダ、すなわちボートの模型（前2900年頃）。これは上のメソポタミア南部の湿地帯で見られるボートと同型である。バグダッド、イラク博物館。

シア湾のバーレーン島と同定されているティルムンに置かれていることも重要であらう。その神話は農業の起源と発達に関するもので、地母神であるニンフルサグと邪悪であると同時に恵み深い水神エンキとの闘争の副産物が語られている。さらに、このシュメール人の海上渡来説を支持するものは、オアンネスの神話の中にも見出すことができる。すなわち、その神話によれば、半人半魚のオアンネスは海から現われて、人々に文字、科学、美術、都市や神殿の建設、農業、生活の手段等——実際、シュメール文明を特徴づけている全てのことを教え、夜になると海中に姿を消したと語られている。この神話は水神エア（エンキ）が同時に知恵の神でもあると見なしていたシュメールの伝承の一バージョンであつたことはまちがいないであらう。また、（ギリシア語の）オアンネスは確かにエアの一バージョンのように見える。にもかかわらず、文明が長い、苦痛を伴う発展のプロセスを経ずに、しかも充分に進歩した形で出現するという伝承は、海を越えてやって来た一民族がメソポタミア南部に突然都市的な集落を営んだという事実と合致する。シュメール人はそのような地域において、統治するのに必要な技術と政治組織を携えて渡来したのである。

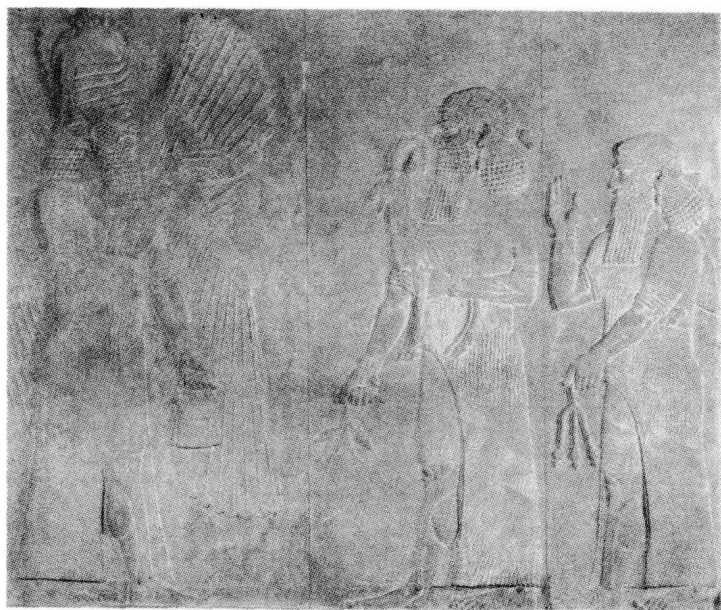
ついで、彼らはこの地において湿地帯周辺の沖積平野に神殿とそれを取りまく都市を建設し、穀物とこの土地の特産品であるナツメ椰子を栽培し、家畜を飼育した。彼らはまた、運河や湖沼からチグリス・ユーフラテス川、そしてペルシア湾へと航海する船を建造し、イラン高原、小アジア、シリア、そして前三千年紀には早くもエジプトやインダス川流域にまで隊商を派遣した。遠い山地の金属や石はこの沖積層の地で珍重され、レバノンやアマヌスの杉も需要が大きかった。ギルガメ



▲右図はラガシュのウルナンシの石灰石製奉納用飾り板。テロ出土（前2630年頃）。彼は「大いなる人」または「神への奉仕者」として、神殿建築に重要な役割を果たし、粘土煉瓦のバスケットを運ぶさまが描かれている。古代メソポタミアの王の地位は、彼と一緒に描かれた人々、すなわち王の隣に立っている後継者アクルガル、および逐一名前が挙げられている家臣たちよりもそのプロポーションを大きく描くことで示されている。パリ、ルーブル博物館。



▲石膏製の飲料水を貯える桶（前3000年頃）。そこには葦の小屋から走り出る動物や仔牛が浅く浮彫りされているが、そのような小屋はメソポタミア南部の湿地帯で今も使われている。うず巻状の頭部を持つシンボルは豊饒の女神イナンナ、もしくはイシュタルのものであり、この彫刻は彼女の神殿にとりつけられていたと思われる。ロンドン、大英博物館。



コルサバードのサルゴン2世の宮殿出土のアッシリアの浮彫り（前8世紀）。萎れた蓮の花は、王の死もしくは重病を表わし、山羊はおそらく罪の償いのための犠牲獣であり、ユダヤの贖罪の日のスケープゴートのようなものである（レビ記16・1—28）。中央に大きく描かれている人物が王であり、彼は国民のために贖罪の供物を捧げている。（王の病気の間、損なわれていた）祝福や豊饒の伝達者である王の回復は、豊饒の松かさを持つ有翼の守護神から授けられる。